令和３年(2021)秋彼岸会 第145号(1)

寺報

発　行　福島市田沢字寺前18
長秀院・仲興寺
ＴＥＬ　024(548)1240
ＦＡＸ　同　上
ホームページ　http://www.choshuin.jp/
e-mail　info@choshuin.jp/

編集責任　渡辺 祥文

九月十九日現在、新型コロナウイルス感染症は全国的に第五波の感染拡大も鎮静化に入りつつあるようです。ただし大型連休後はどうなるかわかりません。今後も皆で充分に気を配り油断なく対処してまいりましょう。

今現在まさに「ウィズコロナ」の日々が続いています。

お互いにいつ元に戻るのだろうとイライラしていますが、前の状況に戻ることはないと考えるべきでしょう。

マスクも手指消毒も続けていくしかありません。大きな転換点に生きているのでしょう。自らの意識の転換とともに、「平常心」を基本に落ちついて向きあう日常をつくり出してまいりましょう。

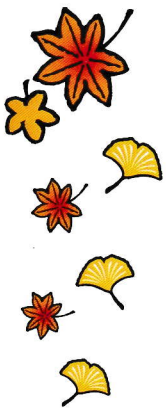
案内板

仲興寺
秋彼岸供養・念仏供養
○九月十七日（金）
午前十時
（コロナ第五波中なので代表者にておつとめいたしました）

長秀院
そばを食べる会
洗心講座法話……中止

旅行会……中止

福島県宗務所主催
梅花流福島県奉詠大会……中止



令和三年　仲秋

山主拝

雲水日記 その三

渡辺 秀憲

彼岸花が咲き金木犀が香り、秋の気配を実感しております。皆様いかがお過ごしでしょうか。前回は地蔵院のお話でしたが、今回は永平寺の山門に立った日のことをお伝えしようと思います。

地蔵院は上山するにあたっての最低限の知識とふるまいを身につける場。実はまだ永平寺に上山したとはみなされません。前回は地蔵院の木版を鳴らしましたが、今度は永平寺の山門で再び木版を鳴らし、正式に入門を請うのです。

平成三十年三月十七日早暁、大本山永平寺山門に立ちました。その年は記録的な大雪に見舞われ、なお残雪が高い壁のようにそびえたっていました。習わしとして、一番早く地蔵院に到着したものが代表し木版を鳴らします。しかし一向に誰も来ません。実は誰にも気づかれていないのではないか。待ち続けて時間の感覚もなくなり、寒さに手足の感覚がなくなった頃、やっと一人の修行僧が現れました。

「木版をたたいたのは尊候らか。何をしに永平寺にきたのか。」その修行僧が納得する答えを返さなければ、上山は許されません。木版を鳴らした者が答えます。「最高の仲間とともに、最高の環境で、充実した修行生活を送るために来ました！」必死に答えを考えてきたのでしょう。

修行僧は彼を見つめてこう返しました。「環境は整っている。最高の修行仲間にも出会えるだろう。しかしここは尊候が充実感に浸るための場所ではない。そもそもなぜ永平寺でなければならないのだ。」彼は答えに窮し、重い沈黙が流れました。再び永遠に続くかと思われた静寂ののち、ぽつりと修行僧が告げました。「まあ、意欲は伝わってきた。これからの修行生活で、自分の修行の意義を常に考えるように。」そうしてやっと草鞋を脱ぎ上山を許されたのです。

自分は何をしにここへ来たのか。なぜここにいるのか。修行中私が常に自問し続けた問いであり、それはおそらくすべての修行僧も同じでしょう。山門に立っての問答は修行僧にとっての原点であり、一生忘れられない記憶として刻み込まれたのでした。

「ウィズコロナ」ということ

ワクチン接種は済んだけれど

新型コロナウイルス感染症第五波は猛威を振るいました。八月は日本の医療が実質的に崩壊した期間だったと雑誌等でいわれています。高齢者のワクチン接種も終わり、国民全体の接種率も五十パーセントを越え安心がようやく訪れつつあるかと思っておりましたが、変異株の拡大は、人間の対策を越え、現在は若年層の拡大、高齢者も改めて三回目の接種へ向かう方向のようです。自然界においては、人間の思いなど通用せず、新たな対策方針で向き合わなければならなくなりました。

「今後も、とにかく罹患しないようにして下さい。油断は禁物です！」と医師の言葉を遵守するしかありません。

「新型コロナウイルス感染症の本当の姿を正当に評価できるのは早くても五年後ぐらいでしょう。こういうものだといえるようになるのは研究が尽くされてからです。今はパンデミックの真っ只中です。いくら嘆いても仕方ありません。しっかり守るべきことを守り、かからないようにしましょう。」これもまさに真実であると思います。

百年後の真実

四～五年前、寺院住職の集いで話題になったことがあった。

「百回忌のご精霊が多いんだけど、貴寺（そちら）はどう？」

「あっ、そうそう、確かにそうだねェ。来年から続けて多いネ。貴寺（おたく）もそうなの？」

すると、まわりの住職たちも「そうだねェ確かにそうだ」と言い出した。年忌の精霊を各宗にお知らせするのに過去帳を見て調べて皆がそう思ったのです。その時長老格の住職が「それはねェ、スペイン風邪ですヨ。全国で多くの方々が亡くなったからね。それも最初は何が何だか昔の人はわからなかったのだから、大変だったでしょうね。」

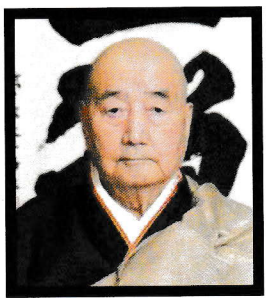
スペイン風邪は、ご存知のように当時の新型インフルエンザであり、第一次大戦により世界パンデミックを起こし、中世のペストに相当するといわれた新型インフルエンザでした。一九一八年から一九二一年頃まで猛威を振るったといわれています。野口英世博士の母、有名な野口シカさんも一九一八年にスペイン風邪で亡くなられました。県内においても、一つの村が全滅したという記録まで残っています。当時はウイルスがよく理解されていませんでした。細菌とは別のより小さいものが想定されていたそうですが、電子顕微鏡もなくわからなかったのです。予防する方法が見出だせなかったといっても良いかもしれません。学者の中には、本当の終息・収束には五年を要したという説もあるとのことです。

蛮勇にならないように、無理をせずに

間違った勇気を蛮勇といいますが、早く元に戻したいと無理をすると年末年始に予想される第六波も拡大させてしまうでしょう。まさしく「ウィズコロナ」、コロナウイルスと一緒に生きていくしかありません。今、日本で広がって一年半、有効な薬、有効な治療法が確立し、変異毎、六ヶ月単位のワクチン対応等が整備されれば、生活も安定することでしょう。とにかく、それまでは「平常心」を保ちつつ、無理せず、予防の徹底を頑張ってまいりましょう。

（住職拝記）

大本山永平寺 七十九世東堂 福山諦法禅師様ご遷化



大本山永平寺貫首（住職）であられ昨年九月末日をもって退董（引退し東堂となられた）された福山諦法禅師様が去る令和三年九月十日ご遷化（逝去）されました。

故宮崎禅師様の後に貫首の位に就かれ永平寺在住十二年、曹洞宗の僧俗を教化されました。

弟子秀憲も上山から二年八ヶ月指導いただきました。昨年福山禅師様の退董法要（引退引継の法要）においては、秀憲は三年目雲水として接客関係の責任者をつとめ、八十世南澤禅師様をお迎えし、十一月に永平寺を送行（師匠の寺へ帰ること）してまいりました。修行上山中指導いただいた禅師様でした。正式発表前の十日に内々にお知らせを受け、師匠である私にも夜に連絡がありました。お体がたいへんになられてからの退董でしたが、生涯を行雲流水の修行として生き、永平寺住職として全国を巡る日々を過ごされ、満八十八歳まで行じることの尊さを改めてお示し下さったものと只々感謝あるのみです。

両大本山の貫首禅師様は、二年交代で宗派の代表「管長」職をおつとめになります。私事ですが、私自身特派布教師として、「管長名代」として、管長様のおことば「管長告諭」をたずさえて全国を巡らせて頂く立場であり、十四年目となりました。（この二年間はコロナ禍のために巡回していません）その間福山禅師様管長の告諭を読み上げさせて頂いてきました。そういう意味でも尊く有難いご縁であったと改めて合掌礼拝するところです。

（住職合掌拝記）

こども坐禅会

夏休みに入った七月三十日、学習センターの主催で例年通りこども坐禅会を実施しました。コロナ禍中十三名の小学生が参加され坐禅と写経に取り組みました。

福島とうろう流し（仏教会主催）

規模を縮小し、無参拝者（一般の参加参列なし）で隈畔において代表住職による読経供養にて八月二十日（二十日盆・十七日は雨で順延）修行されました。NHK、福島テレビでその様子が放映されました。来年こそ、通常通りのとうろう流しができるようにと仏教会全体で願っているところです。

行事の中止について

デルタ株の猛威、ブレークスルー感染と、ワクチン接種で元に戻る訳にはいかないようです。寺院行事も無理のないようにクラスター発生とならないように、行事中止を継続いたします。

おねがい

お盆前後は行事も多く、住職が不在がちになります。種々の相談等でお急ぎの場合は電話またはFAXにてご確認下さい。

電話　〇二四―五四八―一二四〇
FAX　右　同